

ランタン・ヤードはなぜ滅びたか

「サイラス・マーナー」に関する一考察

宮崎孝一

I

奪われた金が十六年ぶりに戻り、娘として育ててきたエbbie (Ebbie) の婚約も決まったとき、サイラス・マーナー (Silas Marner) は三十年余り前に捨てた故郷ランタン・ヤード (Lantern Yard) をエbbieとともに訪れてみる決心をする。彼は娘に言う。「……牧師のバストーン (Paston) さんにも会いたい。わしがあの盗みをやったのでなかったことがみんなにわかるような事が起こっているかも知れない。バストーンさんはもののわかった人だったし、——くじで罪人を決めたことについても話してみたい」(二十一章)

しかし、せっかく四日の旅の後にたどりついてみると、ランタン・ヤードのあった土地はすっかり工業化してしまつて、昔のおもかげはいささかも留めていかなかった。「ここかしこで、血色の悪い汚れた顔が、うす暗い戸口からこの見知

らぬ二人をじろじろと見ていた。それでエbbieはますます不安になった」(二十一章) サイラスは言う、「なくなつてしまつたよ……ランタン・ヤードがなくなつてしまつたんだ。ここにあったはずなんだがね……あの大きな工場をごらん、みんななくなつてしまつた——チャンペルも何もかも」(二十一章) こうして、旧知に会つて無実の罪をそそぎたいというサイラスの願いはついに果たされることができなかつた。

作者ジョージ・エリオット (George Eliot) は、なぜランタン・ヤードを地上から抹殺し、サイラスの素朴な、しかし、真剣な希望を叶えさせてやらなかつたのであろうか。

この小説の事件の起こつた時代は、十九世紀初頭ということになっており、英国で産業革命が急速に進んだ時期であるから、事実ランタン・ヤードのように工業化の波に没してしまつた村落はたくさんあつたことであらう。しかし、それだけでは、この小説におけるランタン・ヤードの消滅を、正

当化する説明にはなるまい。

II

この小説におけるラヴィロー (Ravello) の村人たちの生活、その中心であるカス (Cass) 家の者たちの言行は、透徹したリアスティクな筆で写されている。酒亭レインボー (Rainbow) に集まった男たちの荒げずりな会話のもし出す鄙びた雰囲気、他国から移って来たサイラスに対する村人たちの不信任感、サイラスの金を盗んだのが旅の行商人らしいということになったときの、人々の留ることのない臆測、ダンスタン・カス (Dunstan Cass) の愚鈍でありながら利害に抜け目のない考え方、弟を憎みつつ、自分の秘密の結婚を暴露されるのがこわさに明確な手か打てず、また、秘密の結婚の相手モリー (Molly) が行き倒れになったと聞いたとき、彼女が死んでいることを祈るゴドフリー・カス (Godfrey Cass) の陋劣などが、周到な観察に裏づけられて如実に語られている。モリーの死後ゴドフリーの妻になるナンシー・ラミター (Nancy Lampter) も美人ということにはなっていないが、決していたずらに理想化されてはいない。彼女の教養の程度については次のように記されている。

ナンシーはテドマン (Tedman) 夫人経営の小学校より上の学校にいったことはなかった。聖書以外の文学の知識といえば、大きな刺しゅう布に、小羊や牧羊女の絵の下に縫いつけた詩句ぐらいのものであった。そして、差引勘定

をするためには、目の前に並べたシリリング銀貨や六ペンス銅貨から実際にシリリング銀貨や六ペンス銅貨を取り去ってみなくては引き算ができなかった。……彼女は少々高慢で、思いやりがなく、根拠のない意見でも変えようとしな
いことは、誤りを犯した愛人に対しても相変わらず実を示すのと同様であった。(十一章)

結婚後のナンシーは種々の幻滅を味わった後、次のように言う。「どんなものでも、前もって考えていたようによいものはありませんね——わたしたちの結婚だってそうでしたわ」(十八章)

このようなラヴィローの村人たちの生活のリアスティクな描写と並行して語られる、廃坑のそばの石小屋の中のサイラスの生活がある。ラヴィローへ移って後の彼の生活は、エビーを授けられるまでの、守銭奴としての十五年間と、エビーによって人間性を取り戻してからの十六年間とから成っている。辛苦したためた金を盗まれて狂気のようになり、やがて虚脱状態で一か月ほどを過ぎた後の大晦日の晩に、サイラスはエビーを与えられる。

……彼は炉辺の椅子に腰をおろし、薪をかきたてようとして前かがみになった。そのとき、彼のかすんだ視力に、炉の前の床に黄金が置かれているように見えた。金だ——自分の金だ——奪われたときと同じ不思議さで、また返されて来たのだ。……彼の興奮した目の下で、その黄金の山は輝き出し、大きくなっていくように思われた。ついに彼

は身をかがめて、手を押ばした。しかし、手触りに覚えのある固い輪郭の貨幣ではなく、彼の指は柔かく温い巻き毛に触った。(十二章)

いかに近眼のサイラスとは言え、金髪を金貨と見まごうことは現実にはあり得ないであろうが、これはすでにおとぎばなしの世界に属するでき事として描かれているのである。サイラスは隣人に向かって言う、「……お金は、どこともわからない所へ行ってしまうって、この子がどこともわからない所からやってくるのです」(十四章)

エビーはなぜ、サイラスの心をよみがえらせる力を持っていたのであるか。生気にあふれた幼児の愛らしさが、サイラスの閉ざされた心の底に潜んでいた人間性に触れたのだと言えようが、しかし、作者は独自の人生観によってその意味づけを行なっている。

サイラスは、はじめてエビーを認めた瞬間、幼くて死んだ自分の妹が戻って来たのかと思つた。それと共に過去の記憶が一度に心に浮かんで来た。

……昔のわが家と、ランタン・ヤードへ通ずる古い町筋との幻影が浮かび、それと共に、あの遠い土地で彼の感じたいろいろな事がらがよみがえって来た。……この子供が、その古い昔の生活から送られて来た使いでもあるかのような夢のような気持ちを感じた。それは、ラヴィローに來てから一度も動かされたことのない心の琴線を動かした。

——かつての愛情のゆらめき——自分の生活を支配してい

るある強力なものに對して、昔感じた、畏敬の念が呼びさまされた。(十二章)

これまでのサイラスは、ランタン・ヤードで親友と思つていたウィリアム・デーデン (William Dane) に裏切られたことによつて、宗教と人間とに對する信頼を失い、つとめて過去と断絶した生活を送ろうとして未知の土地ラヴィローで金をためるだけの生活を送り、いつか金をためること自体が生活の目的になつていたのであった。しかし、人間が過去とのつながりを断ち切ろうとするとき必ず生活が狂うものであることは、ジョージ・エリオットがその作品でくり返し述べているところである。「アダム・ビード」(Adam Bede)のヘスター・ソレル (Hester Sorrel)、「ロモラ」(Pomola)のティート・メルマ (Tito Melama)、「ミッドルマーチ」(Middlemarch)のニコラス・バルストロード (Nicholas Bulstrode) などの生き方の失敗はその著しい例であろう。これに反し、「フロス川の車屋」(The Mill on the Floss)のマギー・タリヴァー (Magie Tulliver) や、「フェリクス・ホルト」(Felix Holt)のエスター・ライオン (Esther Lyon)の生き方は、過去を大切にした者の歩みを示しており、同様のことは「サイラス・マーナー」の中で、成人後のエビーによつて示される。彼女は、実の父ゴドフリー・カスが名乗り出て彼女を引き取るうとしたとき「親しくなつた人たちと別れることはできない」という理由できっぱりと彼の申し出を拒絶する。

エビーが現われる前にも、作者は、サイラスが何かの折にふと過去を思い出すことを描いて、彼の情緒がまったく枯れ尽くしてはいないことを示している。例えば、二章では、サイラスが昔母から教えられた薬草によって靴屋の妻の心臓病を治してやったとき、「ラヴィローに来てはじめて、過去と

現在とのつながりを見出したような気がした」と述べてある。また、十二年間使い馴れた土がめを落して割ったときも、その破片を捨てずに元の場所に納めて置いたとも述べられている。このようにサイラスの心に潜在していた過去をいとしむ感情が、エビーの出現によって急激に動かされ、やがて正常な生き方に立ち返り、村人たちとの円滑な接触へも導かれることになる。このようなサイラスの心の動きに従えば、いずれはランタン・ヤードを訪れてみたいという気持ちが生ずることはきわめて自然の成り行きである。ランタン・ヤードを訪ねることなしには、サイラスの心の回復の道程は完成されないのである。

そこではじめに提出した問題に立ち返るがなぜ作者はサイラスを旧知たちと会わせなかったのであろうか。パストン牧師が、サイラスが潔白であったこと認め、ウィリアム・デーロンが自分の裏切りをわびる場面をなぜ描かなかったのであろうか。それは、そうすることによってサイラスを囲む民話の雰囲気が現実の世界に接触することになり、どちらかのイメージが破壊されるからである。サイラスが現実を圧倒すれば、too good to be trueの感を与えるであろうし、現実の

方がサイラスを押えるなら、サイラスの今までの心の成長は根柢のないものだったことになるであろう。それで作者は、ランタン・ヤードを消滅させることによって、勝負を預かってしまったのである。

「デイヴィッド・コパーフィールド」(David Copperfield)の結末で生活無能者のミコーバ (Micawber) をオーストラリアの保安官にしたチャールズ・ディケンズ (Charles Dickens) をはじめ、ヴィクトリア朝の作家の多くは、その小説をリアリズムで一貫することができなかった。勸善懲惡趣味や、低俗な理想主義に災いされることが多かった。ジョージ・エリオットも「アダム・ビード」では「アーサー・ドニン」(Arthur Donnithorne)とハスター・ソレルとの不倫の恋を罰し、アダムとダイナ・モリス (Dinah Morris) とを必然性を無視して結婚させ、「プロス川の水車屋」ではタリヴァー家の兄妹を不和の数年の後、死に臨んで和解させ、「ロモラ」では現実に破れたロモラを聖女の生活にはいらせ、とりわけ、最終作「ダニエル・デロンダ」(Daniel Deronda)ではグェンドレン・ハーレス (Gwendolen Harleth) をめぐるリアスティックな描写と、ダニエル・デロンダを中心とする理想主義的な描写とを無理に結びつけようとして大きな失敗に陥っている。

「サイラス・マーナー」において、おおむねリアリストティックに描かれていると言えるカス家の運命にも、やはり応報的考慮はなされている。ゴドフリー夫妻の間に生まれた一人の

子供が育たず、その後、子供が授からぬこと、成人後のエピソードを引き取るうとしてエピソードにはねつけられることは、ゴドフリーが幼いころのエピソードを自分の子供として認めようとしなかったことへの罰と考えられるし、ダンスタンがサイラスから奪った金をいだいたまま溺れて死ぬのも悪事に対する報いであろう。この種の要素をこれ以上押し進めて書いたならば、「サイラス・マーナー」は教訓臭に満ちた鼻持ちならぬ作品になっていたことであろう。この点から言っても、サイラスの訪れたランタン・ヤードは消滅していた方がよかったのであり、この小説が小品ながら、ジョージ・エリオットの全作品中最も完成に近い作品であると呼ばれる理由の一つも、こういう所にあるのだといえよう。